

ハイデッガーとアリストテレス

——ピュシスの取戻しをめぐる——

西野 真由美

一

新しい思想は、それに先行する伝統との対決から形成される。形而上学の創始者であるアリストテレスが、ギリシアの諸思想家との対決の中で自らの問いを発展させていったのと同じように、ハイデッガーはギリシア以来の西欧形而上学、とくにアリストテレス哲学の伝統に根底から対峙し続けた。この執拗な問いは、どこから来ているのだろうか。

西欧形而上学がもたらしたとされる近代技術の様々な矛盾や弊害を前にして、ハイデッガーは、非西欧的思想、すなわち東洋的なものとの対話の必要性を自覚する⁽¹⁾。しかしその際、彼は安易に自己の伝統を捨てて、他なるものへの解決を求めるような道はとらなかった。他者との対話を実りあるものにするためにも、まず

自己の伝統の本質を明るみに出すこと、それがハイデッガーにとって第一の思惟の事柄だったのである。

そこで、小論の本来の目的は、ハイデッガーを通して、かかる西欧形而上学の歴史の命運を見極めることにある。その準備のひとつとして、ここでは、ハイデッガーによるアリストテレス哲学との対決に注目する。アリストテレスこそは、ハイデッガーの思惟に出発点から多大な影響を与え、後に、その克服が彼の最大の思想的課題となった哲学者である。この対決は、我々に、西欧形而上学の歴史の根源を開示してくれるに違いない。

二

ハイデッガーによれば、ギリシアにおいて現前性という意味での存在をあらわしていた根本語はピュシス(*ψυχή*)⁽²⁾であった。ピ

ユシスとは、「出現して自己起立すること、自己の内に滞留して自己展開することである。この主宰することの内に、根源的な統一から分かれ出た静止と運動とが秘められ、また開示される」(GA 30, 290)。この規定からもわかるように、ピュシスはギリシアの始源においては、生成と存在との統一概念であった。だが、この始源的なピュシスはすぐに見失われてしまう。その後、アリストテレスが登場する頃には、ピュシスは生成と存在という対立概念へと分裂してしまっていた。そこでアリストテレスは、ピュシスを静止・自己同一性とみなして運動を否定する解釈を批判して、存在を運動するものとして把握し、しかもその運動をロゴスにおいて定義しようとする。つまり、アリストテレスの課題は、生成・存在の各々の立場を批判しながら、再び両者を統合してロゴスにおいて語ること、つまり始源的ピュシスを概念把握によって取り戻すことであった、とみることができよう。

アリストテレスがこのように考えたのは、彼が我々にとって最も身近な現実から出発したからであろう。日常的経験からすれば、存在は変化・運動するピュシスとして出会われる。まず、根源的な運動としての世界を直接的に経験する生があり、それがロゴスによって認識される、これがアリストテレスの前提であったと思われる。

アリストテレスによって哲学への導きを与えられた初期ハイデッガーは、この課題をアリストテレスから引き継いだ。つまり、

アリストテレスとハイデッガーを歴史を越えて結びつけていたのは、始源的ピュシスの概念的把握の問題、すなわち、根本動性としてのピュシスがいかにして存在者となるのか、いかにして我々に経験可能なものとなりうるのか、そしてそれがいかにして多様な仕方方で語られうるのか、という問いだったのである。

こうしてハイデッガーは、デユナミス・エネルゲイアという運動原理に出会う。ハイデッガーの解釈によれば、「デユナミスとエネルゲイアに関する探究の問題地平は…存在とその多様性におけるその統一である」(GA 33, 52)。この地平は、カテゴリーとは別の仕方方で存在を、ピュシスを語るものである。一体どのような仕方方で、それがハイデッガーのアリストテレス対決における問いの核心である。

三

アリストテレスにおける諸カテゴリーは、ウーシア (*ousia*) に述語されるといふ仕方方でウーシアを語る。それに対してデユナミス・エネルゲイアは、直接的にウーシアを運動の原理から語る仕方である。前者は、主語としてのウーシアのカテゴリー的構造を問う。後者の問いは、ウーシアそれ自体を運動と捉えて、可能態としてのデユナミスから現実態としてのエネルゲイアへの転化に注目する。ここでは後者の問いをピュシスとの関係から詳しく考察したい。まず、アリストテレス自身の定義の検討から始めよう。

「第一義的で主要な意味でピュシスと言われるのは、各々の事物の内にそれ自体としてその運動のアルケーを内在させている事物のウーシアのことである」(Met. 1015a15)。

アリストテレスは周知のように、第一実体と第二実体を区別したが、ここでいうウーシアは、あらゆるロゴスに先立ってあらかじめ現前し、それゆえにカテゴリーの構造の中ではただ「このもの」としか名指しえないような究極的實在、つまり第一実体である。かかるウーシアがピュシスとされる理由はこう言われる。

「ピュシスを有する物は全てウーシアである。というのは、それらのものは一種のヒュポケイメノン (hupokeimenon) であり、ピュシスは常にヒュポケイメノンの内にあるからである」(Phy. 192b 34-35)。これはどのような事態を指示しているのだろうか。

ウーシアは諸カテゴリーによって述語される前に、そもそも一つの対象として把握されていなければならない。そこでは、あらかじめ、あるものが「このもの」として出会われている。この「すでに出会われているもの」がヒュポケイメノンであり、ハイデッガーはこれをさらに「前に横たわっていること」と訳している。つまりヒュポケイメノンは、カテゴリーに先立って、そもそも存在者が存在者として我々の前に横たわっている事態をいう。そしてこの事態の内にピュシスがあるということは、「前に横たわっていること」の内には一つの運動が、すなわちピュシスが、自らを我々の前に横たえ、ウーシアとして現前する運動が隠され

ているということの意味する。こうして、カテゴリーによる問いにおいては、決して述語にならず主語にかなりえないものとしか規定されなかった第一実体が、それ自身の内に動性を宿したピュシスとしてあらわになってきたのである。

しかしながら、第一実体が諸カテゴリーに先立って既にまなざしの前に横たわっているとしたり、その内なる動性をデユナミス—エネルギーはどう語ろうとしているのか。次にそれをハイデッガーの解釈に沿いながらみていくことにしよう。

アリストテレスによれば、「デユナミスの」第一原理とは、他のものの内にあり、または他のものとしてのそのものの自身の内にあるところの転化のアルケーである」(Met. 1046a11-12)。これにハイデッガーはこう注釈を加えている。「デユナミスは出発である。つまり、転化への出口 Von-woraus であり、しかも転化するものとは別の仕方であるものである」(GA33, 83)。「転化するものとは別の仕方」とは、デユナミスが動かされるものそれ自身ではなく、動かされるものを、「に適合していること」あるいは「適性」という方向へと転化していく「力」であるということを意味している。従って、それ自身の内にデユナミス有するピュシスは、元初の自己を適性という自己の内なる他者に委ねることによって、自己を別の自己へと転化していくのである。

そして、転化していく先がエネルギーであるエネルギーは、デユナミスのもつ現実性が現実化されること、つまり事実的な遂

行である。それによってピュシスは此方に立てられ、形を持って見えるようになる。またこの動性は常にひとつのテロス(目的)へ向かうものであり、その意味では、エネルギーは、エンテレイア(完成態)への「途上にあること」に他ならない。

ここで重要なことは、デユナミスからエネルギーアへの転化においてはおじめて、存在者と我々との出会いが可能になる、より明確に言うならば、世界が生起するということである。デユナミスーエネルギーアという動性は、ピュシスが自己自身を可能的な力から事実的な遂行へと現実化し、世界を開きながらその世界へ参入していくことである。この動性をハイデッガーは一つの道にたとえて言う。「ある一つの道は、ある一つの境域を通じていき、それ自身を開くとともにその境域を開きはじめる」(GA9, 291)。つまり、ピュシスの動性は、自己の転化の途上で、自己を存在者として開示し、同時に我々と存在者との出会いの場としての世界を開いていくような道なのである。

さらに注目すべきことは、アリストテレスがこの動性を質料ー形相関係に結びつけていることである。このことについてハイデッガーは次のように評価を下す。「質料ー形相という区別は、…ピュシスへの問いのある一つの全く新たな領域へと移し置くのであり、その領域ではじめて、ピュシスの動性ー性格への問いという、かの不問に附されてきた問いが答えられ、そしてピュシスがウーシアとして、つまり現前することの仕方としてはじめて充分

に概念的に把握されるのである」(GA9, 273f)。

当該箇所のアリストテレスの言葉を聞こう。「かくしてピュシスは、その一つの仕方では、自らの中に動性と転化とのアルケーを有する事物の各々にとってそのヒュポケイメノンとなっている第一の質料のことである。しかし、もうひとつの仕方では、ピュシスは、事物の形態であり、ロゴスにとって明らかになる形相である」(Phy. 103a28—31)。

アリストテレスはピュシスが別々の二つの状態で現前していると言おうとしているのであろうか。いやそうではない。第一質料としてのピュシスはデユナミスであるとアリストテレスは明言する⁽²⁾。しかしピュシスは、エネルギーアにおいて、つまり形相を獲得してはじめて見えるようになるのであるから、第一質料としてのピュシスはそれ自体としては知られないものである。だからアリストテレスはいう。「質料をともなった結合体としての実体にはロゴスは無い(というのには、質料は規定されないものだからである)」(Met. 1087a27—28)。そこからすれば、学問の対象となるのは、ただ形相としてのピュシスだけである。ウーシア、すなわち現前を語るとは、形相を、それが必然的に質料と結合しているとしても、思惟の上では質料と分離して独立的に語ることに他ならないのである。

ではこのような区別をピュシスの動性へ導入することが何故それほど決定的な事柄となりうるのであろうか。

アリストテレスによる一連のピュシス解釈をハイデッガーは一つの根本命題に表現している。「ピュシスはウーシアとして、つまり現前することのひとつの仕方と様態として把握されねばならない」(GA9, 261)と。

ピュシスは前述のように現前への道である。そこでのピュシスは、アルケーとしてその道の出発であり、同時に質料から形相へと集め立てられるよう動かされる者それ自身でもありつつ、さらにこの動性の完成において自己自身へと帰りゆく先(テロス)でもある。こうしてピュシスは、アルケーとしてのピュシス・動かされる途上にある者としてのピュシス・テロスとしてのピュシスという三者の統一体であり、しかも、常にデユナミス(質料)からエネルギー(形相)への転化の途上においてのみ、存在者として現前する。そして、ピュシスがウーシアとして把握されねばならないというアリストテレスの解釈によれば、この動性で最も重要なのは、途上にあることとしてのピュシスである。従って、ピュシスの動性は、形相を獲得するという目的にむかう動性と定義されるのである。

だがここに見逃しえない問題が提示される。それは、ピュシスの出現という動性が、同時にアルケーとしてのピュシスが自らを遠ざけていくことでもあるというところである。蕾が自己を拒むことで花として現前し、花が自らを遠ざけることによって、果実が与えられるように、ピュシスが我々に対して身近なもの、つまり

世界内存在として現前するためには、元初の自己が、自己自身を遠ざける動性が必要なのである。それはひとたび出発したならば、決して元初へと逆戻りすることはない。また、そこで動かされているものも、もはや元初を知らない。元初から質料へ、質料から形相へと自己を委ねていく道は、根本的な差異の生起である。ここにおいて我々はすでに、アリストテレスを離れてハイデッガーのピュシス解釈に踏み込んでいる。その動性は一方的なものではなく、遠ざけることによって近づけるという二重の動性である。同じピュシスの動性を問題としながら、アリストテレスのそれは決して、この自己を遠ざけることによって、物への近みを与えるような動性に向けられることはない。何が両者を分け隔てているのだろうか。

アリストテレスのピュシス解釈で決定的なのは、形相の優位である。これはピュシスを概念化して把握しようとした彼の当初の姿勢に適合しているといえよう。デユナミスは、すでにある目的を前提とする概念である。その目的のもとに他を排除することで、ピュシスは質料となり、形相へ向かう力を獲得する。しかしこの概念の導入によって、質料は目的によって「支配されるもの」となり、その時点で形への歩みが強要されている。しかも、この強要が遠ざけや排除を含んでいることには関心はむけられない。もちろんそのことは、ピュシスが排除によってしか現実性を獲得することはできないことに基づいて正当化される。我々は、形相以

外のものをロゴスにおいて捉えることはできないからである。

だが、ハイデッガーの立場は異なる。「もし以下のようなのであるなら、我々はまだビジネスを表面的に思惟しているにすぎない。つまり、ビジネスを単に出現と出現させることとしてのみ思惟し、ついでビジネスに何らかの諸特性を認め与え、その際、自己を表すことが隠すことを決して退けないばかりか、それが露頭することとして現成するがままに現成するためには、むしろ隠すことを必要とする」という決定的な事柄に注意を払わないならば」(VA, 96)。隠すという動性は、出現への動性であるデュナミス—エネルギーによっては充分に捉えきれないばかりか、逆に質料—形相という関係によって被い隠されてしまう。そこにハイデッガーは、アリストテレスによる「ビジネス解釈の限界をみるのである。では「隠し」という動性はどのようなものなのか。それは¹⁰⁾ビジネスを適性へと贈りだしている動性である。そして、此方へと立てることによって自己を遠ざける働きである。アリストテレスは「ビジネスを単なる出現の動性にしてしまったが、ハイデッガーからすればそれは事柄の一方にすぎない。「出現することは、そのこととしてその都度すでに、自らを閉ざすことへと傾いている。出現は自らを閉ざすことの中に保蔵されている」(VA, 28)。だからビジネスは出現であると同時に「出現としての」ビジネスと *Abwesenheit* [「自己隠匿」]との接合の合一的現成をいう」(GAS, 158)。この二重性とそれの接合を捉えないならば、ビジネスは思

惟されたことにはならないのである。

「存在はそれ自身を隠匿しつつ露頭することであり、——つまり始源的な意味での「ビジネス」である」(GAS, 30)。始源的「ビジネス」は、出現と隠匿との関わりあいから根源的に生起する場を名指している。だがそれは、「現れでないものうちでも特に現れでないものにとどまらざるをえない」(VA, 264)のである。

四

デュナミス—エネルギーという原理は、出現という動性が、ビジネス自身の内に差異を生起させる道であることを開示したが、この動性から自己を隠そうとする反対の動性は暗示されるだけである。さらにそこに形相の優位が持ち込まれる時、この暗示さえも忘却されてしまう。始源的な「ビジネス」を取り戻すために残された道は、自己を隠し遠ざける動性をあらわにしうるような思惟を、始源的思惟との対話の内から見出すしかない。ここに至ってハイデッガーは、思惟の方向を始源への「歩みもどり」へと転回するのである。

始源的な「ビジネス」を取り戻しうる思惟、それは同時に、自然を技術によって支配されるべき一領域へと限定していく目的連関的な世界像の克服の道でもあるはずだ。だからこそハイデッガーはみずからの伝統の根源であるギリシアの始源に繋がりとうとするのである。それが後期ハイデッガーの *Geleit* (四方域) という世

界へ結実していくことになる。天・大地・死すべきもの・神々の四者からなるこの世界は、西欧的思惟の伝統を越える世界を切り開いていくのだろうか。それとももっと別の新しい力が必要だろうか。ハイデッガーがアリストテレスを克服しえたかという問いの真の答えもそこに隠されているはずである。この問いを次の課題として考察をひとまず終えることにしたい。

※引用はすべて本文注に(略号、頁数)の順に示す。引用文中の……は筆者による中略、「」は筆者による補足、傍点は筆者による強調である。尚、引用略号は以下の通り。

ハイデッガー：GA→全集(数字は巻数)。VA→Vorträge und Aufsätze。
アリストテレス：Met→Metaphysics. Phy→Physics.

- (1) VA, 43.
- (2) Heidegger, Nietzsche I, S. 211.
- (3) Phy. 184b15 ff.
- (4) 初期ハイデッガーはとくにカテゴリーの構造の分析を中心この問題を扱っている。筆者はこれについて、拙稿「初期ハイデッガーにおけるカテゴリー問題の展開」(『実存思想論集Ⅲ・存在への問い』以文社、一九八八年所載)において考察した。
- (5) GA33, 9.
- (6) ハイデッガーはピュロケイメノンを、まず「前に横たわっているもの」とし、さらにそれが「前に横たわっていること自身をも意味しつゝ」(GA9, 260)と規定する。
- (7) アリストテレスによれば「質料とはエネルギーにおけるこのものではないが、デユナミスにおけるこのものであるようなものはい

き」(Met. 1042a28)。

(8) GA33, 157.

(9) GA9, 282.

(10) 小論はハイデッガーのアリストテレス対決という観点からピュニスを考察したため、ハイデッガー自身のピュニス解釈については詳述する余裕がなかった。これについては、拙稿「ピュニスと差異——転回期ハイデッガーにおける隠匿性への問い」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』第四十二巻所載)を参照されたい。

(にしのみゆみ、倫理学、お茶の水女子大学助手)